



〒399-8103
長野県安曇野市三郷小倉6086-2
社会医療法人城西医療財団
ミサトピア小倉病院
TEL0263-76-5500(代)
FAX0263-76-5501

精神科療養病棟150床
老人性認知症疾患療養病棟50床

安曇野日和

表紙： 「凍れるバラ」 撮影者：薄井 尚介（内科医師）

連載コラム 院長室だより 病院長 篠崎 英夫

WHO 精神衛生部長等が来日

本年、1月10日から13日まで 国立精神神経センターの招きにより WHO（世界保健機関）ジュネーブ本部の部長DR SAXENA（サキセナ）、マニラ地域本部の精神衛生課長DR WANG（ワン）、それにブラジルからWHO顧問のDR BERTOLOTE（ベルトローテ）の3氏が 日本の自殺対策へのアドバイスの為に来日しました。

私は DR WANG精神衛生課長の3代前の前任者なのですが、それは今から35年前のことで、当時は1ドル360円 日本人として 初めての課長職でした。私は精神衛生課長としては 二代目で 初代は DR NIMB（ニンム）と言う デンマーク人でした。

WHOには WHOマフィアという言葉があり 一度 職員をした者は 世界中 何処に居ても 何時までも 仲間だという意識があります。それ故 私は 東京に馳せ参じ お会いしたわけです。ブラジルからの DR BERTOLOTE は私とほぼ同年齢ですが 地球の裏側からのトンボ帰りの日程を精力的にこなしていました。さすが 国際公務員と 感心したり 懐かしく思い出したりしました。

表紙写真 撮影者薄井先生のコメント

寒い日の朝、院内のバラ園に1輪残っていたバラを撮影しました。

精神科病棟だより

五大疾病の中の精神疾患を考える

副院長 桑村 智

平成23年7月に厚生労働省は、がん・脳卒中・心臓病・糖尿病というこれまでの四大疾病に精神疾患を加えて五大疾病とする方針を打ち出しました。実際にうつ病や認知症など精神疾患の患者さんの数は、いつの間にか先の四大疾病を大きく上回ってしまったようです。

かつて精神疾患といえば統合失調症が代表的で、治らない病気として多くの研究や治療的関心を集めていました。しかし世の中に抗精神病薬が登場して半世紀を経て、特にここ数年の進歩は目覚しく、かつては入院を余儀なくされていたであろう患者さんも早期発見・早期治療により、その多くは重症化することなく社会生活を継続することが可能となりました。

反面、高齢化社会と叫ばれてから十数年が経過して、かつての予測は現実となりました。75歳以上の後期高齢者と呼ばれる方たちが日本の人口の10%を超え、認知症の割合も比例して増加しています。この点に関して当院は開設当初から認知症療養病棟を持ち、地域医療に対しても多少の貢献はしてまいりました。更に平成22年10月からは、この領域のスペシャリストである岸川雄介先生をお迎えすることにより、当院の認知症に対する力量は目覚しく拡大しています。

うつ病に関してはどうでしょう？このことは当院において、まさに今後の大きな課題です。「こころの風邪」と称されて一般にも多く知られるようになりましたが、その割合は今や10人に1~2人と言われ、職場・学校・地域など人の集まる場所には必ず発生するといっても過言ではありません。これだけ多く存在するのですから、うつ病の患者さんに対して当院は門を開かなくてはならないでしょう。当院の立地条件は風光明媚、「癒し」という点において高いレベルだと思います。うつ病の治療において、この点は大いに活用し、院内の環境も徐々に整えていく必要があると思います。

「こころ」と向き合う時代となった今、より社会に貢献するためにも時代を見据えた病棟運営を目指して行きたいと考えています。

精神科 病棟レク

精神科療養病棟では、病棟ごとにレクリエーションを行っています。

1月は、2-2病棟では毎年恒例のお餅つき、2-3病棟ではやしろうまとまゆ玉を作りました。作業中、患者様はにこやかに作業され、最後にみんなそろって試食した時にはとても満足げに召しあがっていました。



2-2病棟 臼と杵を用いてのお餅つきの音は病棟中に響き渡りました



2-3病棟作 まゆ玉とやしろうます

1-3病棟ではフルートの演奏を鑑賞し、おしるこを食べるレクリエーションが行われました。患者様は、普段聞くことができないフルートの生演奏に感動され、聞き入っていました。



1-3病棟 フルート演奏

介護療養病棟だより

認知症療養病棟での認知症治療の基本的考え方 ①

医師 岸川 雄介

人の脳は、じっと座って情報処理をするコンピューターの様なものではありません。身体全体がより快適な状態になるように、身体を動かし、仲間との生活を実行するために活動しています。身体が脳のためにあるのではなく、脳が身体のためにあるのです。

認知症とは、脳の働きが低下して日常生活を今までどおりに維持できなくなった状態のことです。単に情報処理に問題があるのではなく、動き、表現することにこそ問題が起こっています。記憶力だけではなく、目的に合わせて行動を選択し、実行すること。社会生活を営むために人と意思疎通を果たすこと。そういう機能が障害されることで、認知症の状態となっています。

私たちは認知症の方をお預かりした時に、BPSDなる“症状”を薬で“治し”、ただじっと座らせて手や指での作業をさせたり、スタッフが優しく手厚く世話したりすることで、より良い治療になっているとは思っていません。

まず、大切なのは身体です。人間だからです。脳は身体のために働いているからです。最初に、身体の異常をできる限り治療して快適になっていただきます。それから、その方のできる範囲で運動をしてもらいます。身体を動かしてもらいます。身体を使ったゲームやスポーツは、身体表現の大切な行為です。脳が喜ぶことだと思います。体操、簡単なスポーツやゲームを可能な限りやってもらいます。

次に、仲間との交わりの中で自分を表現してもらいます。共同でのカレンダー作り、フラワーアレンジメント、料理会、行事計画の立案・実行、テレビゲームでの競い合いなどなど、脳は、グループでの活動を通じ、表現し、必要な情報を収集するべく活発に活動します。

たとえ、認知症疾患で脳機能が低下していても、人は、そのできる範囲で懸命に身体を動かし、表現し、人との交わりを楽しもうとしています。このような活動をしていただくと、認知症の方の表情が変わってきます。

私たちは、認知症が脳の機能低下で起こっているということを良く理解し、脳の働きとは何であるかを良く理解し、勝手に”認知症”なる病気を決めつけることなく、より良い治療を行っていきたくらいと願い、最新の理論に基づく試みを続けています。

作業療法 門松作り

平成23年12月27日(火)に、介護療養病棟(1-1病棟)のホールにて門松を作る作業療法が行われました。担当の病棟職員が先頭に立ち、竹・梅・南天等の材料は数名の病棟職員の自宅より持ち寄る等して集められ、多くの患者様が見守る中8名の患者様が作業療法に参加されました。



一生懸命飾っています

作業は、担当の病棟職員のアドバイスのもと、色やボリューム等のバランスが良くなるように患者様自身が考えながら、一つずつ丁寧に進められました。

以前、門松を作ったことがある患者様は、昔飾ったことを思い出しながら、積極的に取り組まれ、初めて門松を作られた患者様は、完成した門松を見て感動され、高さが1メートルほどの大きな門松を1日かけて1対作り上げた時には、病棟中から拍手がおきました。



完成です

平成24年 新年式



関総長のあいさつ

平成24年1月4日(水) 仕事始めの日に、大会議室にて新年式が行われました。

関総長は、診療報酬の改定・安全な医療の提供の観点から今年の抱負を語られ、篠崎院長は、乾燥によるウイルス感染を防ぐために、加湿の重要性について語られました。



篠崎院長のあいさつ

職員の趣味のコーナー

フラワーボトル

2-2病棟 飯島 友子

フラワーボトルは、生花の美しさ・色を保ったまま、ビンの中でドライフラワーにできるものです。記念日に頂いた花や丹精込めて育てた花等、思い出の花を長く楽しむことができます。また、アレンジによりお正月・ひな祭り等の季節感を取り入れることもでき、お手入れをして、乾燥した日光の当たらない所に飾れば、5年以上観賞することができます。

飯島さんは、フラワーボトル歴15年以上のベテランですが、ビンへの乾燥剤の出し入れが難しく、イメージ通りの作品に仕上げるのはとても難しいようです。小さく愛らしいお花から、枝付きのりんごの花まで、幅広い材料・アレンジで作品を作り、フラワーボトルの講師としても活躍しています。



飯島さんの作品は、事務所に飾ってありますので、是非ご覧ください。

フラワーボトルの作り方

1. 新鮮な生の花をアレンジしてビンに入れます。
2. 乾燥剤(ドライフラワー専用のシリカゲル)を花全体が埋まるまで入れ密閉し、1週間から10日後に乾燥剤を静かに出します。
3. ビンを密閉し、ラッピングをすれば完成です。

編集後記

平成23年度末を前に、少しでもミサトピア小倉病院の取り組みを知って頂こうと広報担当者が奮起し、試行錯誤の繰り返しで第3号を発行することが出来ました。創刊号発行から8ヶ月が経過し、そして、当院も3月1日で開設から10周年を迎えることを思うと、時間の速さを感じます。次号も、より内容のある広報誌を目指して努力いたします。

広報委員長 樋口 孝